

金陀美具足

徳川家康公（1542-1616）が若いころに着ていた金色の鎧。19歳の時、桶狭間の戦いで大高城に食糧を運び込むという困難な作戦を指揮した際に着用した。この戦いは、長い内乱の時代を経て、勝利した織田信長（1534-1582）の天下統一への足場を固める、日本史上のターニングポイントとなった。この戦いの後、家康公をはじめ多くの武士が支援を約束した。

胴体の前後を大きな鉄板で覆ったこのような鎧は、1500年代後半によく見られ、1600年の関ヶ原の戦い以降に広く使われるようになった。2枚の板は、左側が蝶番、右側が紐でつながっている。胸当ての紐はオリジナルである。

重要文化財